

我はいかにして 途上国学徒となりしか

塩田 光喜

◎ 第七話 慶吾出世

父、慶吾が仁尾に帰ってきた。一から出直してである。

慶吾が目をつけたのはイリコである。イリコ、標準語では煮干しという。日本でダシをとるのに使われる素材としては、イリコ、カツオ節、昆布の三つがあるが、カツ節のだけはアッサリとして上品で東日本で好まれるが、西日本では濃くてシツカリしたダシがとれるイリコが好まれる（北日本は昆布ダシ）。

イリコの材料の小イワシの漁場が仁尾が南面する燧灘にあり、仁尾の漁師や伊吹島の漁師が盛んに水揚げし、とりわけ、伊吹のイリコは有名である。

これを買集めて、大阪の乾物問屋に売りに行くのである。

帆掛け舟に水手数名。ある時、嵐に遭い、海はシケにシケた。大の男がオイオイ泣いたほどの嵐だったという。慶吾は「帆を降ろして、荷を全部、海に放り込め！」と怒鳴ると、甲板に大の字になって、「運否天賦よ」とつぶやいて揺すられていたという。小男だが、肝っ玉は太かったのだ。

難破することもなく、無事、仁尾に帰り着いた慶吾の運は、これをきっかけに、グングンとウナギ昇りになってゆく。

慶吾は中津賀地区に、蔵付きの家を建て、手広く商いを拡げてゆく。

そして、ついには、大阪の歌舞伎を仁尾の芝居小屋に呼ぶ勸進元にまでのし上がるのだ。

